

第5回大岡信さんお誕生日(2月16日)企画イベント「みしまとまこと」

詩人・大岡信と三島をめぐるおはなし

◆感想も含めて補足しながらご報告します◆

大岡信 ～原点は富士山の湧き水～

江戸末期、大岡家は代々徳川家に仕える旗本で、信の曾祖父にあたる直時は徳川慶喜の駿河移住に随行しその後三島に住み、のちの三島警察署長を務めました。直時の息子(信の祖父)は貿易商を志し、信の父博ら家族を連れて横浜、神戸を転々としたあと、なんと家族を置いて上海へ愛人と逃避行！？その後上海で客死しました。残された博と家族は直時の縁を頼り三島に移住しました。しかし生活は苦しく、博は目指していた小説家を断念し生活のために教師になり、また結婚した母も教師として生活を支えていました。教育者として尽力しましたが、そのかたわら窪田空穂らの指導を受け歌人として活躍しました。楽寿園の中には歌の碑があります。



浪の秀(ほ)に 裾洗はせて 大き月 ゆらりゆらりと 遊ぶがごとし

大岡信は1931年2月16日、三島町(現在の三島市)に博の長男として生まれました。

信は中学まで田町の奈良橋付近の借家に住んでいました。すぐ近くに御殿

川、源兵衛川があり、湧き水の中には藻があって小魚がたくさん泳いでいました。川の流れが急に変わるところがあり当時そこにフンドシで飛び込むドンドンという遊びが流行っており、信は学校から帰るとこのような川遊びや釣りをして日常的に水にふれて過ごしていました。両親が共働きで不在のことが多く、広小路のあたりで母方の実家がたばこ屋、祖母が駄菓子屋をしていたことからよく遊びにも行っていました。また、たくさんの本にふれて過ごしていました。

三島町奈良橋回想

掘抜き井戸が狭い小さい庭にあった。

茗荷がちよぼちよぼ生えてみた。

塀ぎはに白萩の　これはりつぱな群生もあつた。

ほんとにちつこい借家だつた、恥づかしいほど。

だが何てつなつて　あの透き徹る

冷たい清水。　天の甘露よ　地の玉露。

なまぬるい水道水は引いていなかつた、そのかはり
縄で吊るした西瓜が、真赤に冷えて滴つた。

観世流の謡うたひをうなつてゐた父ちゃんも、

暗いうちからお釜をしやかしかしやか炊いでくれた

母ちゃんも、この水が　誇りだつた。

夢の中でも　伸びた藻草がゆらゆら揺れて、

坊やはやがて　この奥の　水の都へ帰つて来るのさ、

ゆらゆらと頬笑んで　手招きしてみた。

●三島町奈良橋回想

『世紀の変わり目にしやがみこんで』2001年 思潮社

「奈良橋」は大岡さんが生まれて幼少期を過ごした地名。そこでの暮らしの記憶がたどられています。同時に、昭和初期の、水とともにある三島の人々の生活描写ともいえます。最終連では、実生活から離れた幻想的な世界が展開。それは、大岡少年が水を通して見ていたもうひとつの世界です。「坊や」とは作者自身で、水の都・三島は大岡さんにとっての内なる原風景であるようです。

詩人・大岡信と三島をめぐるハンドブック「みしまとまこと」より

水底吹笛

三月幻想詩

ひようひようとふえをふかうよ

くちびるをあをくぬらしてふえをふかうよ

みなぞこにすわればすなはほろほろくづれ

ゆきなづむみづにゆれるはきんぎよくさ

からみあふみどりをわけてつとはしる

ひめますのかげ――

ひようひようとあれらにふえをきかさうよ

みあげれば

みづのおもてにゆれゆれる

やよいのそらの　かなしさ　あをさ

しんしんとみみにはみづもしみいつて

むかしみたすゐしやうきゆうのつめたいゆめが

けふもぼくらをなかくすのだが

うつすらともれてくるひにいのらうよ

がらすぎいくのゆめでもいい　あたへてくれと

うしなつたむすうののぞみのはかなさが

とげられたわづかなのぞみのむなしさが

あすののぞみもむなしからうと

ふえにひそんでうたつてゐるが

ひめますのまあるいひとみをみつめながら

ひとときのみどりのゆめをすなにうつし

ひようひようとふえをふかうよ

くちびるをさあをにぬらしふえをふかうよ

●水底吹笛

『大岡信詩集』1968年 思潮社

すべてひらがな表記の詩。ひらがなの文字の並びや、一文字一文字が一音一音として連なって、言葉が美しく響きあっています。ひらがなの形の柔らかさは、水の流れや藻がゆらめいているイメージとも重なります。そこから漂うのは、静けさや透明感、はかなさ。そして音の無い水の底に座ってひとり、水面の方を見上げながら笛を吹く少年。大岡さん18歳の詩作で、まるで自身を投影しているようです。後に、豊かな水をたたえた三島で生まれ育ったからこそ詩だと語っています。

詩人・大岡信と三島をめぐるハンドブック「みしまとまこと」より

この詩はとても内省的で感傷的です。ヒメマスが金魚草の間をスツスツと泳ぐ姿、お尻の下の砂がホロホロとくずれる様、聴こえるのは水が外の雑音を遮断しコポコポという水の流れる音のみ、自分だけの隔離された世界でひとり水面を見上げています。手触りその触感がかなりリアルです。子供の頃の水遊びの経験が詩に大きな影響を与えています。そして信青年の胸の痛みを感じます。失恋して深く傷ついてしまったのですね…

信は沼津中学(現在の沼津東高)に通っていた14歳の時に詩を書き始めました。父博はとても厳しい人でした。博は自分の父(駆け落ちした)のこともあり、信に大きな期待をかけていました。そして信はそれを裏切ることなくよく応えていました。小学生の頃から短歌でいくつも賞をもらっていました。父は歌人でもありましたから、信には短歌のリズムがすでに慣れ親しんで身についていましたが、しばらくすると表現の限界を感じはじめ、しだいに詩も書くようになっていきました。

その頃太平洋戦争が始まり、信は勉学よりもお国の為にと軍需工場で働かされていました。この時の信は「自分はいずれこの戦争で死んでしまうのだ」と絶望しながら毎日を過ごしていました。終戦を迎えると「20歳で死ななくていいんだ！」と大喜びしました。その後、フランスの詩人ポール・エリュアールの「そして空は、お前の唇の上にある」という言葉に出合い衝撃を受

けます。この言葉によって信の人生観は変わっていきます。

沼津中学で友人たちと文芸クラブを起し、旧軍需工場にあった紙の裏にガリ版刷りで文芸雑誌「鬼の詞(ことば)」を作って月に一度、クラブのイケメンたちを連れて近くの女学校まで売りに行っていました。

本人は勉強をあまりしなかった、といいながら、旧制一高(現在の東京大学)に飛び級の4年生で入学しました。そこでも文芸部に所属し創作活動をしていきます。その頃に書かれた詩が「水底吹笛」「木馬」「夏の思いに」「方舟」です。信18歳から20歳の頃の作品です。「水底吹笛」「夏の思いに」は三嶋大社で再会した小学校時代の女教師？との失恋を匂わせています。メランコリックな「木馬」はのちに妻となる相澤かね子さんあてに宛てた詩です。信にとって詩は現実と向き合うためのツールでもありました。

人は山河を背負ふ

生まれたのが たまたま

富士山の南側の町だったから

ぼくにとって 富士山は故郷の山。

昔 問はれたことがある

「君にとって 富士山とは 何か」

「富士山は 水だ」

相手は一瞬絶句した。

ぼくに懐かしい富士山は

この山の雪解け水が

岩盤をゆるゆるめぐって

町の北で湧きあがる

豊かな川に そびえてゐた。

ふるさとは

他郷の人には思い及ばぬ相貌そうぼうで

あなたの中に息づいてゐるのだ。

麓ふもとに住むものにとつては

富士山は 背中にずつしり重い

巨大な 暗い

清らかな 水の塊かたまりり。

●人は山河を背負ふ

『鯨の会話体』2008年 花神社

「富士山は水だ」と答えた大岡さんの言葉は、三島に住む人にとっては共感できるものでしょう。古来より三島の人々の暮らしと深く結びついていた湧水は、長い年月をかけてもたらされる富士山からのめぐみ。溶岩の地下を通過して湧き出す水の、100年近くの時間に思いを馳せてみましょう。大岡さんの、故郷の自然に対する感謝と畏怖の念、それらによって形成されていた自分自身の発見が伝わってきます。では、あなたにとって富士山とは？故郷とは？

詩人・大岡信と三島をめぐるハンドブック「みしまとまこと」より



三嶋大社までの川沿いにある「水辺の文学碑」に大岡信の碑があります。

次ページへ続く

故郷の水へのメッセージ

地表面の七割は水

人体の七割も水

われわれの最も深い感情も思想も

水が感じ 水が考えてゐるにちがひない

この地上から奔騰する湧水群は

おのおの管のパルスで生きてゐる一切の

地上の有機生命体の

むさぼるべき最初の吸ひ口

この吸ひ口に命を得て

アマゴ アユカケ アユ光り

この吸ひ口に命を得て

ヤマセミ カワセミ カワガラス飛び

この吸ひ口に命を得て

ゲンジボタル 水底に孵り

アオハダトンボ ヒガシカワトンボ 水底に孵り

この吸ひ口に命を得て

ミズイロオナガシジミ舞ひ

アユ産卵する

この水をけがす者は

いかに私のよき隣人の農薬使ひであらうとも

地表にも 人間の内側にも

まへもつての死をよびこむ者だ

クレソンごときを栽培するため

この水を都会の銭で奪ひとる者は――

生きものの還つてゆく

暗く涼しい遙かな場所を

まへもつて 二流フレンチ・レストランの

ドレッシング・オイルによつて

油まみれにまぜかへす者だ。

静岡県駿東郡清水町に湧水量一日百万トンを超ゆる柿田川湧水群あり。富士山の伏流水湧き出づるところ、三島梅花藻をはじめ珍重すべき魚類鳥類虫類の生育の場となる。河川敷の私有地なるにつけこめる近年の乱開発は、東洋一の湧水量を誇る清流をお手軽グルメ・ブームの下僕となさんとす。1988年3月、地元「柿田川みどりのトラスト委員会」発足。呼びかけに応じ、故郷の水にメッセージを送らんとすれば、詩のごときものわがペン先よりこぼれ落ちたり。今ここに体裁をととのへ、ここに録すと爾云ふ。

自選大岡信詩集 岩波文庫より

信の活動は詩人として詩を作るだけでなく文芸評論家、美術批評家、戯曲の脚本家、翻訳家としても多岐にわたります。また数人で言葉をつなげていく連詩の共同創作にも力を入れ国際的に広めました。

信は2017年4月5日、呼吸不全のため亡くなりになりました。86歳でした。

妻は大岡かね子(深瀬サキ・劇作家)長男玲(芥川賞作家)長女亜紀(日本画家)。

余談ですが、私の姑は年齢が一つ下の学年となります。この講演会へ行く前に大岡信って知ってる？と聞いたら、「よく知っているわよ。講演会は何度も聞きにいったわ」とまるで仲の良い友達のことを思い出すように話し始めました。もしかしたら、女学校(沼津西高)時代、文芸雑誌を売りに来た信とどこかですれ違っていたかもしれないなあ、なんて70年以上前の姑にもあったであろう青春時代に思いを馳せました。

宮内記